

令和4年度公立大学法人北九州市立大学評価委員会（第6回）議事要旨

1 開催日時 令和4年8月2日（火）13:30～15:25

2 開催場所 オンライン会議（北九州市役所5階プレゼンルーム）

3 出席委員（五十音順：敬称略）
井上 洋美、権頭 喜美恵、安浦 寛人、吉谷 愛

4 議事内容

（議事に入る前に、議題1の非公開について全会一致で決定した。）

（1）評価（案）の検討及び決定

非公開による協議のため、非公表

（2）第4期中期目標期間における取組等に対する意見交換

ア 北九州市立大学から、資料2及び資料3について説明

イ 主な質疑・意見

【教育分野】

（委員）DXを担う人材像は多様である。大学の考える人材像とはどのようなものか。

（大学）多様な学生がおり、一律に定義することは難しい。技術も変わっていくため、状況を注視しながら、どのような人材が必要か検討、見直しを行っていききたい。

（大学）副専攻プログラムにおいて、文系学部では主にリテラシー（初級）レベルを、文系上位層及び国際環境工学部等では応用基礎レベルの人材育成を考えているところである。

（委員）市内企業にはリテラシーレベルの人材が不足している。育成を期待する。

（委員）国際環境工学部には、成績不振者への学修指導を行う退学勧告制度があるが、これは、推薦入試等において理系の素養がない学生が入ってくることがあるためなのか。

（大学）同学部の推薦入試には、数学と理科からなる総合問題の試験を設けており、また、入学後に基礎学力テストを実施し、点数に応じて補習を課している。
ついていけない学生の多くは、能力はあるが勉強していないというケースが多い。やりたいことと学科の教育内容のミスマッチが原因であることが多い。そういった学生には教員が面談を行い、場合によっては転学科あるいは他の進路を勧めるなどしている。

（委員）退学勧告制度は、ネーミングが実態より厳しいものに聞こえる。ネーミングの変更をご検討いただきたい。

(委員) 次世代研究者挑戦的研究プログラムについて、国は、R6 年度以降は 10 兆円ファンドで運用し、拡充していく予定。大学としても、どれくらいの規模で行うのか検討していただきたい。

【研究分野】

(委員) 科研費には間接経費が 30%分あるが、学内でどのように配分しているのか。

(大学) 科研費を獲得した教員自身や、当該教員の所属する部局の学部長裁量経費等に活用している。

(委員) 大学において、獲得教員へのインセンティブとして、また、大学全体の財務的な戦略としてうまく活用していただきたい。

(委員) 共同利用・共同研究拠点に関連して、学術研究都市内の九工大や早稲田大とのコラボレーションについて、中期計画にご記載いただきたい。

【管理運営等分野】

(委員) 同窓会もステークホルダーであり、その活用・活性化についてどのように考えているか。

(大学) 同窓会は、本学にとって大切なサポーターである。高齢化や個人情報保護等の課題を抱えながらも、学生の研究支援、図書館図書への寄贈等の支援をいただいているところである。

(委員) 大学の執行部や現場教員の活動状況については、当評価委員会によくご説明いただいているが、役員会や経営審議会の役割が見えてこない。大学のガバナンス体制がどうなっているのか、評価委員会に対してお示しいただきたい。

(委員) 国立大学では、研究不正や情報セキュリティ、危機管理等に関する SD の参加率は 100%が常識である。計画に明示するかというのはあるが、確実に実施されるようにお考えいただきたい。北九大も同様ということであれば、その旨が分かるような表現等で計画に反映していただくと評価しやすいため、検討していただきたい。

【その他】

(委員) 本来、中期計画は見直しを行うことが可能。コロナ禍等の不測の事態にあたっては、今後は柔軟な見直しについてご検討いただきたい。

(委員) 「整備に着手する」、「見直しを行う」、「検討する」等の表現では、業務実績評価が困難になるため、具体的に表現いただきたい。あわせて、「制度の整備」等、中期計画期間の途中で完了する項目も評価しにくいいため、適切に運用されていることがわかるよう、表現を工夫していただきたい。

(委員) 学生が、既存の枠組みにはまることなく、これからの新しい社会を作っていく一人ひとりであることを自覚し、未来のために考え、学び、学生自らが発信する場が必要ではないか。